

海

風

近藤啓太郎

海風

海 風

定価 1,300 円

昭和55年10月3日 第1版発行

著 者 近 藤 啓 太 郎

発行者 来 馬 希 木

発行所 社団
法人 家の光協会

東京都新宿区市谷船河原町11 (〒162)

電話 東京260-3151(大代表) 振替東京5-4724

印刷 (株)第一印刷所

製本 寿 製 本(株)

©Keitaro Kondo 1980 Printed in Japan

落丁本や乱丁本はおとりかえいたします。

書籍コード 0093-54289-0301

海
風
／
目
次

老人 7

慕情 28

カツオ漁 47

疑惑 66

噂 87

深淵 108

自暴自棄 129

反省 143

船酔い 162

親子 170

漁師の話 179

迷路 191

夜釣り	201
土産話	210
遭難	228
帰宅	254
勘定	265
目には目	274
夏風邪	287
結婚	298

装
丁
舟
橋
菊
男

海

風

老人

猫が不意に行手に飛び出して来たので、大二郎はあわててハンドルを切った。次の瞬間、大二郎はオートバイもろとも道路脇下の畠の中へ突っこんで横転した。顔と手が痛かったが、すぐに起き上がることが出来た。

「大丈夫か」

と言う声がした。

大二郎が背後をふり向くと、もんべ姿の老人が農道に立っていた。

「大丈夫です」

と言って、大二郎は手で顔の泥を拭い取った。

大二郎の顔を見て、老人は声を上げて笑った。小柄な老人には似合わぬ、大きな笑い声であった。

「見事に、顔が泥んこになったな。洗った方がいい。ちょっと、うちへおいで。その家だ」と言って老人は農道沿いに立っている家を指差した。

「はい」

大二郎は素直に返事して、オートバイを抱き起こした。つづいて、オートバイを道路にひきずり上げると、老人はにこりと笑って言った。

「なかなか力があって、元気がいい。大した怪我がなさそうで、何よりだった」

大二郎はオートバイを曳いて、国道から農道へ入って行った。老人の家は通学の道順にあるので、約半年前に新築したものだということを、大二郎は知っていた。が、老人が何者であるかは知らない。

老人はもんぺ姿だが、百姓でないことはひと眼で分った。長い白髪が肩まであって、昔の剣客のような趣きがあったが、眼はやさしい光を放っていた。

老人は大二郎をつれて邸内に入り、庭先にまわると、大声で家の者を呼んだ。老女が奥から出て来て、リビングルームのガラス戸を開けた。

「この子、今その畠の中へ、オートバイもろともひっくり返った。泥んこになっているから、綺麗にしてやってくれ」

「はい、はい」

と老女は返事してから、大二郎の顔を見て笑った。

「ほんとに、泥んこね。ちよっと、そこで待ってて下さいね」

老女は奥へひっこんで行き、間もなくはたきとブラッシを持って戻って来た。老女は庭へ下りると、大二郎の全身をはたきではたいてから、ブラッシをかけて泥を落した。

家の中に入ると、老女は大二郎を浴室へ連れて行った。脱衣室に洗面所があったが、老女は改め

て大二郎の顔を眺めながら言った。

「見事に泥だらけの顔ね。お風呂へ入っちゃった方がいいわ。ちょうど今、主人が風呂へ入ったばかりだから、都合がいい。お風呂へお入りなさい」

瞬間、大二郎は躊躇を感じたが、度胸をきめて返事した。

「はい」

「脱いだものは、この籠の中へお入れなさい。タオルはそこにかかっているものを、お使いなさい」

と言って、老女は立ち去って行った。

大二郎は浴室に入ると、先ず湯で顔と手の泥を洗い落した。右頬と右手首をすりむいていて、少し血が流れていたが、大した怪我ではなかった。

風呂に入ると、大二郎はほっとして溜息をついた。老人と老女は、夫婦なのである。二人とも品がよくて、やさしかった。いったい、何をしている人だろう。ちょっと大二郎には見当がつかなかった。

大二郎は風呂から出て着衣すると、リビングルームへ行った。老人がソファーに腰かけていて、大二郎をふり向いた。

「少し怪我をしたようだが、かすり傷程度でよかったな。ま、そこへおかけ」
「すみません」

と大二郎はお辞儀してから、老人と差向いの椅子に腰かけた。

「薬をつけといた方がいいわ」

と老女が用意の薬を指先につけて、大二郎の顔にぬろうとした。

「大丈夫です。いいです」

と大二郎は照れ臭そうに遠慮した。

「照れることはない」

老人はやさしい口調で言ったが、どこかに威圧するような響きがあった。大二郎は黙ったまま、老女に薬をぬってもらった。

「風呂へ入って、さっぱりとしたか」

と老人は言った。

「はい」

「オートバイに乗って、どこへ行くつもりだったんだね」

「友達の家へ遊びに行く途中です」

「遊びに行く時間は、約束してあるのかね」

「はい。三時に行くっていう約束です」

「そりゃ、いかん。遅刻の電話をかけといた方がいい」

「大丈夫です」

「大丈夫なことはない」

と老人はきびしい口調で言った。

「遊びでもなんでも、約束の時間は大事にしなければいけない。友達は君がなかなか来ないので、心配しているかもしれない。人にそういう迷惑をかけてはいかん。すぐに、電話をかけなさい」
「はい」

「電話はこちらよ」

と老女が大二郎を案内した。

大二郎は友達達の洋三に電話をかけると、老人に礼を言った。

「いろいろとお世話になって、ありがとうございます。これで、失礼します」

老人は黙ったまま、領^{うり}ぎ返し、老女が大二郎を送り出した。

老人の家を出る時、大二郎が表札を見ると、渡辺秀行と書いてあった。大二郎はオートバイに乗って走り出した。洋三の家まで、オートバイで約二十分である。

農村地帯を通り抜けて海岸沿いの市街地に出、今度は漁村地帯に入る。漁港の近くに、洋三の家があった。

洋三の父親は小釣りの漁師であったが、近年、沿岸漁業は不振をきわめている。二人の兄も最初は父親と一緒に小釣りをやっていたが、今ではカジキの突^つき棒^{ぼう}漁専門になって、伊豆下田方面へ出向いているのであった。

洋三は野球の選手をしていたが、抜群に勉強が出来るので、二人の兄が大学進学をすすめていた。父親も賛成だが、経済的な面から国立大学でなければ駄目だと言うのである。

大二郎は洋三の家に着くと、路地に面した玄関の戸を開けた。

「今日わ」

「いらっしゃい」

と洋三の母親が出迎えた。

「みんな待ってるだよ。二階へ上らっせえ」

「お邪魔します」

と言って、大二郎は二階へ行った。

洋三と一緒に相原邦彦と宮内華絵が笑顔で、大二郎を迎えた。

「あら、怪我してるじゃないの」

と華絵が目ざとく大二郎の顔の怪我に気づいた。

「畠の中へ、突っこんじゃったんだ。それで、遅刻しちゃったんだよ」

と大二郎は苦笑して言った。

「でも、大した怪我じゃなくて、よかったわね。じゃ、そろそろ始めようか」

「ちょっと、待って。親父やおふくろを呼んで来るからさ」

と洋三は立ち上って、階下へ両親を呼びに行った。

今日は華絵がみんなに落語を聞かせる約束であった。華絵はこの市の大ホテルの社長の長女だが、変り者と言ってよかった。華絵のレインコートの裏には、墨くろぐろと大きな字で、氏名が書いてあった。人のコートと間違える心配がない、という理由である。女にしては、大胆不敵なところがあった。

華絵は音楽大学進学の希望で、高校ではコーラス部のリーダーとして活躍していた。華絵はコーラスの猛練習を強行することが屢々あるが、男子部員も文句を言わずに命令に従った。文句を言いたくても、華絵に面と向うと気おくれを感じて黙ってしまうのである。華絵は女には珍しい、独特の魅力と威力とを持っていた。

華絵は落語が好きで、レコードを買って来ては、自学自習した。テレビの落語を見ては、手ぶり身ぶりも練習していた。新しい落語をマスターする度に、きまって洋三と大二郎と邦彦との三人に演じて見せた。華絵は自分の家に三人を呼ぶこともあるし、今日のように友達の家で演じる場合もあった。

洋三の両親が二階に上って来ると、華絵の落語は始まった。華絵の落語はもちろん、上手ではない。が、熱演するので、意外な面白味があった。時々、間違えると、華絵は「いけねえ」と言って舌を出し、頭をかいた。みんな笑った。

「すみません」

と華絵は大真面目にあやまってから、また話しはじめた。

華絵の落語が終ると、洋三の父親が笑顔で言った。

「テレビで見る下手な本職より、ずっと面白かっただよ」

「おじさん。どこが面白かった？」

と華絵が訊いた。

「いけねえって、舌を出したところ」

「なあんだ。それじゃ、落語が面白かったわけじゃないんじゃないの。がっかり」

「でも、落語だろうと何だろうと、面白くって、それで人が笑えばいいんじゃないのけえ？」

「それも、そうだけど、でも、がっかり」

と華絵は芯からがっかりした顔になるので、みんなまた笑った。

「まあ、そうがっかりしねえでくらっせえ」

と洋三の父親が言っているところへ、母親が茶菓子を持って来た。

菓子を食べていると、洋三の母親が気がついて言った。

「大ちゃん、顔に怪我してるだね」

大二郎は苦笑しながら、わけを話した。老人の家で風呂に入ったことや、約束の時間は大事にせよと言われて、電話をかけたことを話した。

「そのおじやん、偉い人じゃないのかね」

と華絵が言った。

「お風呂へ入れてくれるなんて、ちょっと変ってるよ。なんとなく大物みたいな感じがするけど、違うかしらね」

「あいよ。そうかも知んねえ」

と洋三の父親は賛成してから、つづいて言った。

「約束の時間を守れて言って、大ちゃんに電話をかけさせたのもえれえだよ。おらがも約束の時間を守ることは、大事だと思うさ。田舎は約束の時間のいい加減な連中が多くて、真面目な人間は